

# ネクロポリス・テーベ研究

—エジプト、アル＝コーカ地区第13次調査(2019-2020年)—

近藤 二郎 早稲田大学文学学術院教授・同エジプト学研究所所長

## Researches of the Theban Necropolis: The Thirteenth Season of the Work at al-Khokha in the Theban Necropolis (2019-20)

KONDO, Jiro Director (Professor), Institute of Egyptology, Waseda University

### 1. はじめに

昨年度『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』において、2019年12月19日から2020年1月19日まで実施されたエジプト、テーベ西岸アル＝コーカ地区第13次調査の概要について報告をおこなった。調査終了後になって新型コロナウイルス感染症の感染拡大にともない2020年12月から予定されていた第14次調査を実施することが出来なくなってしまった。

そこで今回の発表では、第13次調査までに明らかになった成果をまとめ、2021年12月に実施を延期した第14次調査と今後の方針に関して解説を加えることを目的とする。

### 2. ウセルハト墓(TT47)の調査

2007年12月に、テーベ西岸アル＝コーカ地区に位置する第18王朝アメンヘテプ3世(在位：前1388～前1351年頃)治世末期の高官ウセルハトの墓(TT47)の調査を開始した。本調査は、「アマルナ時代」直前にネクロポリス・テーベの岩窟墓で生じた墓の大型化と墓内壁面に施された特徴的なレリーフ装飾の変遷を解明することを目的としていた。このウセルハト墓(TT47)は、1903年のエジプト考古局年報 *Annales du Service des antiquités de l’Égypte*, Tome iv (1903)にH・カーター(Howard Carter)がウセルハト墓の壁面に残された王妃ティイのレリーフの写真とともに簡単な報告をしている。そして、その後、この王妃ティイの肖像のあるレリーフは、墓の壁面から剥されて国外に流出してしまったが、1905年に、パリのオークションで、ベルギーのブリュッセルの王立美術歴史博物館の所蔵(E.2157)となっている(近藤2016)。

ウセルハト墓(TT47)は、アメンヘテプ3世治世末期を代表する岩窟墓であるにもかかわらず、平面プランをはじめとする墓の正確な構造すら明らかとなっていない状況であった。ウセルハト墓(TT47)の平面プランに関しては、D・アイクナー(Dieter Eigner)やフリーデリケ・キャンプ(Friederike Kampp)らが簡単な略図を公開していたに過ぎなかった。

2007年12月に私たちが発掘調査を開始した時点では、ウセルハト墓(TT47)は完全に埋設されており周辺に位置する岩窟墓群(TT174やTT264など)により、おおよその位置を推定していた。発掘調査を開始後、すぐにウセルハト墓の入口と前庭部を検出したが、堆積砂礫の量が膨大であり、墓が掘削された岩盤の強度が脆弱であったことから、砂礫の除去作業に非常に多くの時間を費やさざるを得なかった。

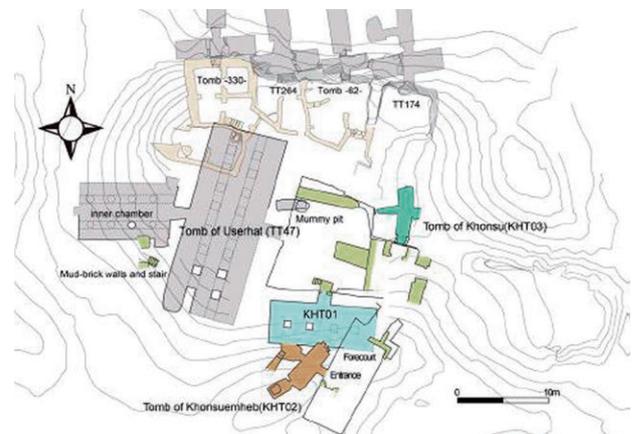


図1 ウセルハト墓(TT47)周辺の岩窟墓のプラン

2020年1月の時点での発掘調査区の岩窟墓の平面プラン(図1)からも、ウセルハト墓が、従来考えられていたものよりも規模が大きく、かつては南北8本ず

つ計16本の角柱を持つ前室と8本の円柱を持つ奥室からなる大規模な岩窟墓であったが、現在では、前室・奥室ともに多くの石柱が欠損しており、特に奥室では、8本あった石柱が全て破損され、基礎部もわずかにひとつが残るだけであった。

このことから、岩窟墓の状況は、非常に脆弱であるため、墓内部に堆積している砂礫の除去には、墓の岩盤の補強などを併行しておこなわないと作業が進展しない状況にあった。そのため、王妃ティイのレリーフが元来あった場所に関しては比較的容易に同定ができたが、太陽神アトゥムと西方の女神を礼拝するウセルハトと太陽神ラー・ホルアクティと女神(ハトホル女神か西方の女神)、そして、中央にアメンヘテプ3世の即位名を持つ精緻なレリーフで装飾された入口上部の楣石(図2)や脇柱などには、大きな亀裂が見られ、このまま入口から前室内部の崩落砂礫を除去することは、入口上部の楣石や脇柱が倒壊する危険性があるため、すぐに着手することが出来なかった。

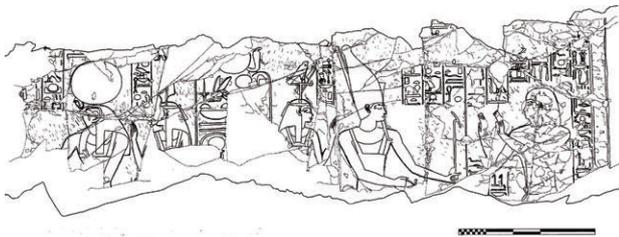


図2 ウセルハト墓(TT47)入口上部の楣石の装飾

しかし、2020年1月に岩盤工学の専門家のホセ・イグナシオ・フォルカデル・ウトリジャ(José Ignacio Forcadell Utrilla)によって入口上部の楣石の倒壊を防ぐための鉄製アングル製の支柱が設置され、入口の内側の羨道部の発掘を開始した。次回の第14次調査では、ティイ王妃の肖像を描いた壁面下部も、未だに発掘されていないため、壁面の保護をおこないつつながら、本格的に前室内部の砂礫除去作業を実施する予定である。また、前室は南北に細長く、両端部分には天井部分も残存しており、天井の崩落を防ぐ処置が必要となろう。前室の南側部分では墓の上部になお堆積が残存するため、上部の砂礫除去作業と前室内部の空間の保護作業の両方をおこなうべきであろう。奥室も前室から内部に入る開口部の上部の岩が崩落の危険性があるため、奥室の内部の調査には、鉄製アングルでの補強が不可欠となろう。

これまでの調査により、ウセルハト墓は未完成の状

態で放棄されたと推定される。岩窟墓内部の清掃作業によって、墓内壁面のどの部分に装飾が施されていたかを確認したい。また、前室の南側の部分にカーターも記述している埋葬室へと通ずる下降通路が存在していたかを確認したい。第14次調査以降は、ウセルハト墓(TT47)の修復保護作業が作業の中心となろう。



図3 第13次調査終了時(2020年1月)

### 3. コンスウエムヘブ墓(KHT02)の作業

第7次調査を実施した2013年12月末に、ウセルハト墓(TT47)の前庭部をクリーニング中に、前庭部の南側で新王国ラメセス朝(第19・20王朝)時代の小岩窟墓が発見された。壁面に記された碑文を解読したところ、被葬者は「ビール醸造長」の称号を持つコンスウエムヘブという人物であった。墓内部の前室の壁面や天井部には、鮮やかな色彩の壁画や碑文が残されており、発見当時は実に良好な保存状態であった。しかしながら、発見後に墓内部の壁面の状態を精査したところ、墓内壁面の応急処置が必要であることが判明した。そのため第9次調査(2015年12月~2016年1月)から、独立行政法人国立文化財機構・東京文化財研究所の前川佳文氏が参加し、コンスウエムヘブ墓の壁画の保存修復作業を担当している。第10次調査では、コンスウエムヘブ墓内部の壁面・天井部の保存修復作業を実施するために、厚い堆積砂礫に埋設していた、元来の入口部分まで掘り下げ、入口から墓の前室内部へアクセスすることで本格的な保存修復作業が実施できる環境を整備した。コンスウエムヘブ墓の前室内部の修復作業では、前室北側に位置する被葬者のコンスウエムヘブ(中央)と彼の妻ムウトエムヘブ(向かって左)、そして彼女の娘アセトカー(向かって右)の3体像があるが、これらの像の下部には空間が存在してい

るため、応急的に彫像下部に壁体を積み上げて補修をおこなっているが、近い将来、彫像内部に鉄製の棒を埋め込むなどして固定作業を実施する予定である。

第13次調査までで、前室内部に堆積していた砂礫のクリーニング作業は終了したが、その際に集められた壁面から崩落した壁画片を元あった位置に戻す作業などが残されている。また、コンスウエムヘブ墓の前室の下にも空間が存在しているとみられ、彫像下部の空間とともに、前室下部にも空間の存在があると考えられ、コンスウエムヘブ墓の壁面の修復作業とともに、こうした空間の把握が必要になっている。また前室の南側に位置している埋葬室に続くとみられる 堅坑(シャフト)内部の調査も急務となっている。

さらにコンスウエムヘブ墓の入口前には、矩形の前庭部が存在しており、砂礫が堆積しているためにコンスウエムヘブ墓へのアクセスがしづらい状況にある。この前庭部は、規模から考えてコンスウエムヘブ墓よりも前から存在していたものと考えられ、コンスウエムヘブ墓により再利用されているとみられる。このことから、コンスウエムヘブ墓の前庭部の南側には、未発見の岩窟墓の存在が推定される。岩窟墓の位置から考えて第18王朝のトトメス4世時代のものである可能性が高いと思われる。

コンスウエムヘブ墓の壁面や天井に描かれた壁画を保存修復し、安定した状態にするためには、コンスウエムヘブ墓の内部や前庭部のクリーニングが、不可欠である。

#### 4. 第14次調査以降の調査計画

以上のように、第13次調査(2020年1月)までに実施した調査内容を振り返り、第14次調査以降の問題を列挙した。2020年12月に第14次調査を実施出来なかったことは調査計画を大きく遅らせることになった。2020年度から新たに科研費・基盤研究(B)・課題番号・20H01352「ネクロポリス・テーベにおける岩窟墓のライフ・ヒストリー的研究」研究代表者・近藤二郎(早稲田大学)の助成を2023年度まで受けることになったが、2020年度は、現地調査を実施することが出来なかったため、2021年度に、繰越申請をおこなった。本調査は、これまでに厚い堆積砂礫の除去作業に多くの時間を費やしたため、今後は、調査場所をウセルハト墓(TT47)とコンスウエムヘブ墓(KHT02)の2カ所を中心として実施していく。

ウセルハト墓では、岩盤の強化をともない墓内部の

堆積砂礫の除去作業を実施し、その構造を明らかにするとともに、未完成として、どこまで完成したかを検討する。

コンスウエムヘブ墓では、前室内部の壁面の保存修復作業によって、壁画を安定したものにするためには、壁画だけではなく、前庭部のクリーニングや墓上部の堆積砂礫の除去、前室下部の空間の調査と補強なども併せて実施することが肝要である。

#### 5. 出土遺物としての葬送用コーン

アル=コーカ地区におけるこれまでの発掘調査によって、調査地区からは、新王国時代から第3中間期、末期王朝時代、プトレマイオス朝時代、ローマ支配時代、イスラーム時代に至る様々な時代の数多くの遺物が出土している。これらの遺物は、土器、石製容器、ファイアンス容器、木製品、護符、装身具、スカラベ、シャブティ像、カノボス容器、ビーズ片、木棺片、カルトナージュ片、レリーフ片、パピルス片、布片、人骨片、ミイラ片、金属製品、ガラス製品、葬送用コーンなど多岐にわたっている。

これらの出土遺物の中で特徴的な遺物として葬送用コーンをあげることができる。発掘地であるアル=コーカ地区は、葬送用コーンが多数分布する地域であり、第13次調査までに、発掘調査によって出土した葬送用コーンで番号(Davies and Macadam #)が判明したものは、以下のものである。

Davies and Macadam(D & M) #2、#4、#13、#15、#20、#22、#24、#31、#36、#54、#73、#87、#91、#103、#109、#113、#117、#132、#173、#176、#189、#206、#208、#211、#221、#222、#231、#267、#308、#324、#340、#356、#357、#362、#372、#391、#406、#418、#423、#452、#469、#486、#489、#508、#510、#513、#530、#547、#551、#553、#558、#559、#561、#562、#579、619/A08、C/KH01であり、57種類の葬送用コーンが判明している。

これらの中で個体数の多い葬送用コーンとしては、D & M #31が11個、D & M #267が44個、D & M #324が26個、D & M #406(TT47の被葬者ウセルハト)が127個、D & M #553が10個、D & M #562が8個、そして619/A08が28個となっている。一つの発掘調査でこれほどの種類の葬送用コーンが発見されることは珍しく、葬送用コーンの出土場所や分布の詳細を今後、分析することで従来の墓と関連した葬送

用コーンの同定に新たな視点を提供することが期待される。また、619/A08とC/KH01の2種類の葬送用コーンは、Davies and Macadamのコーンの集成から漏れているものである。

出土遺物に関しても、第14次調査以降に現地で行きまとめをおこない報告書として刊行することを目指す。葬送用コーン以外でも、文字の記されたパピルスの断片やレリーフ片、カノポス容器、シャブティ像、ビーズネット、護符、木棺片、カルトナージュなどは新王国第18王朝時代から第3中間期、末期王朝時代、プトレマイオス朝時代、ローマ支配時代に関するものであり、この地区が墓域として、どのように使用されていたかを明らかにするものでもある。

#### ■参考文献

・Carter, Howard 1903 "Report of work done in upper Egypt

(1902-1903)", *Annales du Service des antiquités de l'Égypte*, Tome iv.

- ・Davies, N. de G. and Macadam, M.F.L. 1957 *A Corpus of Inscribed Egyptian Funerary Cones*, Oxford.
- ・Eigner, D. 1983 "Das thebanische Grab des Amenhotep, Wesir von Unterägypten: die Architektur", *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 39, 39-50.
- ・Kampp, Friederike, 1996 *Die Thebanische Nekropole*, Mainz.
- ・Kondo, J. and N. Kawai, 2017 "Discovered, lost, rediscovered: Userhat and Khonsuemheb," *Egyptian Archaeology*, 50, Spring, 22-26.
- ・近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合望・高橋寿光・福田莉紗 2020 「第12次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第26号 74-87頁。
- ・近藤二郎 2017 「ネクロポリス・テーベの考古学の現状と課題」、常木晃・西秋良宏・山内和也(編)『季刊考古学：特集・西アジア考古学・最新研究の動向』第141号 79-82頁 雄山閣。
- ・近藤二郎 2016 「ブリュッセル、王立美術歴史博物館所蔵の王妃ティイのレリーフ(E.2157)」*WASEDA RILAS JOURNAL*, No.4, 7-15頁。
- ・近藤二郎 1994 「テーベ私人墓第47号」『エジプト学研究』第2号 50-60頁。